

日本語を学生と学ぶ (余滴)

——「神仏を拝む詞」「喧嘩の際の決まり文句」など——

添 田 建治郎

はじめに

畑の隅に近い山際に如何にもポツンと棕櫚の木が立っている。野鳥がその実を啄み種子を運んできたか。多くが和棕櫚である。関東以西に多い常緑の高木樹で原産地は九州南部のようだが、耐寒性が強くて比較的寒冷な広島県北でも結構見かける。

幹を覆う黒褐色の棕櫚皮で作った箒で、遠い昔、学校や家々の廊下や下駄箱の周辺、玄関口などをよく掃いていた。左に貞国昭龍氏(広島県竹原市出身、八四歳)が語る棕櫚体験を記す。

強い繊維質の表皮は、箒や箕に仕立て、牛馬を繋ぐ綱、紐、縄、下駄の鼻緒を綯い、筵などの敷物を編んでいた。そのまま束子や漉し器代わりにもした。箕は雨を通し難い上物だったが、色合いが猪の体とよく似ており着込んだ猟師仲間を誤射する事故も起きた。幹も、材質が柔らかく梵鐘を傷つけないところから撞木に加工するなど、棕櫚の用途は実に広がった。葉や茎も捨てずに編み笠、団扇、蠅叩きなどを作った。表皮や葉等々を買って取りに人が来ていた。周りに野蠻を普通に見かけた小学生の頃、「蠅叩き競争」があつて年一万匹を退治する猛者もいた。

寛永通宝などの穴あき銭も棕櫚製の紐で通して束ねたようだ。文献の記載例では、『本草和名』(980頃)の「栴櫚木一名抜櫚和名濱呂乃岐」(下巻・五五オ)が早く、直後の『和名類聚抄』には「繩を綯った」とある。中世には棕櫚葉を象った紋所にも描かれた。

櫻櫚 ……一名蒲葵——櫻櫚二音念關俗云種魯 説文云栴櫚可以為絮……

〔伊勢二十巻本和名類聚抄〕(980頃) 卷二十・四六オ)

櫻櫚 同シウロ又スロ 蒲葵同 栴櫚同

〔前田本色葉字類抄〕(1171?) 下巻・六九ウ)

櫻 — (櫚) 念關二エ 谷云シウロ 上カラタチ

〔観智院本類聚名義抄〕(1312奥書) 佛下本・四五ウ)

…山ノ南ヲ陣ニ取テ、峯ニハ錦ノ御旗ヲ打立、麓ニハ白旗・中黒・栴櫚葉・梶葉ノ文書タル旗共、其數滿々タリ。

〔太平記〕(14世紀後) 卷三十一・笛吹時軍事)

稲は重宝な農作物で、稲藁から屑藁、糠、粉殻、果ては灰に至るまで残らず活用された。重宝な点では竹もまた同様である。

文化は先人の暮らしの知恵(息遣い)の中に宿される。ここまでの日本文化と日本人を育んできた日本語である。この掛け替えのない「宝物」を、次世代が引き継ぎ磨いて欲しいと願っている。

一 「まんまんさん」は「南無阿弥陀仏様」

(1) 幼児語の「まんまんあつ」

○ 子供の頃、仏壇の前で祖母が「まんまんちゃんの前ではおまんに座りゃー」と言っていました。「まんまん」とは何? 手を合わせて拝む時は大声の「まんまんちゃん、あん!」。意味不明です。
(人文・Mさん)

○ 祖母の家に行くと、「まんまん様に『まんまんあつ』しておいで」と言われます。「まんまん様の上のおまんじゅう食べてもいいよ」とも言われます。家族も私もそれで大きくなりました。
(人文・Kさん)

「まんまんちゃん」や「まんまん様」は仏様を言う幼児語である。祖父母が、孫を仏壇の前に呼び「仏様にちゃんとお参りしなさい。」と躡しよけている。正座して目をつぶる、手を合わせ、頭こぶを垂れ一心に拝む。MさんやKさんが言う「まんまんちゃん、あん!」「まんまんあつ」は、幼い子供らが仏壇の前で唱える称名念仏・拝む詞である。

二〇〇三、四年度に、三百名を超える受講生を対象にアンケート調査を行ってみた。大半が西日本出身者だった(東日本の出身者は僅かに三名)。左の二つがその質問項目である。寄せて久しい核家族化の波、「祖父母と一緒に参り」はめっきり減って、問一で「はい」に○を付けた者の割合は「二割をやや超える程度」と低かった。問一「まんまんあつ」を言ったか聞いたかしたことがありますか。問二「まんまんあつ」以外の言い方がありましたか。

右の問二の記入欄に書かれた文句を表一に出身府県別に挙げてみた。後掲表三の全国分布と対照するに回答の確度は高そうである。

表一 受講生の称名念仏・拝む詞(幼児語)

富山県…ねんねさん あーん	愛媛県…のんのんさん あん
岐阜県…まんまんあん	福岡県…まんまんちゃん/まんまんちゃんあつ(2) /まんまんさん
滋賀県…まんまんさん、あん/まんまんさん	佐賀県…まんまんちゃん/まんまんちゃんあつ
大阪府…まんまんちゃんあん/まんまんちゃん	長崎県…まんまんちゃん/まんまんちゃん
兵庫県…まんまんちゃん/まんまんちゃん あーん	熊本県…まんまいちゃー
鳥取県…のんのんさん	大分県…まんまんちゃん/まんまんちゃん
鳥根県…まんまんあー/まんまんさん/まんまんあつ	鹿児島県…なんなんさん
広島県…まんまんちゃん/まんまんちゃん/まんまんさん、あつ/まん	他に鳥根、広島、山口三県に各一人「まんまんあつ」。()内は複数回答者数
まんちゃんあつ/まんまんちゃん/まんまんちゃん	
ちゃつあん/まんまんちゃん/まんまんさん	
神仏や先祖の御霊 <small>みたま</small> に頭を下げて合掌礼拝し「まんまんさまー」と	

拜む。姿勢を戻しながら言う「あつ（あー、あーん、あん、あい）」には、講演会の講師や店員が出席者や客に一礼し、姿勢を戻しながら口にする、恐縮・畏まりの気持ちを表す内破音「あつ〔あ〕」や吸気音「すーあ」と似た働きがある。そのような感動詞を末尾に付けた「まんまんあつ」類を、表一に挙げた内省の中から拾ってみる。

まんまんあー／まんまんあつ／まんまんーあつ／まんまんあん／まんまんさん、あつ／まんまんさん、あん／まんまんちゃーあつ／まんまんちゃつあん／まんまんちゃんあつ／まんまんちゃんあーん／まんまんちゃん・あん／まんまんちゃんあん／まんまんまー／ねんねさん あーん／のんのんさん あん

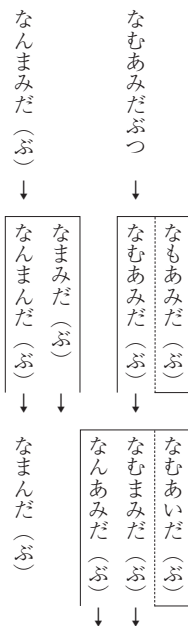
中でも、接尾語「さま」の変異形と感動詞「あつ」「あん」「あーん」との間に読点や中黒点を打つ、間を一字分空けるなどして、感動や畏まりの思いを表した例（傍線部）に注目する。前掲Mさんの「まんまんちゃん、あん！」は感動詞に続けた感嘆符が、後掲Yさんの「まんまんちゃん、アツ」では片仮名の表記が祈り拜む思いの深さを表していた。友定賢治編『全国幼児語辞典』（東京堂出版 一九九七年）は、全国の「神仏を拜む詞」について、文句末尾にアー、アイ、アツ、アンやハイイ、ヘー、パチパチ等を付した各類を中心に詳しく紹介する。

(2) 「まんまんさん」の原形は何だろうか

仏菩薩の称号が「阿弥陀仏」である。浄土宗や浄土真宗では、その阿弥陀仏を本尊とし称名念仏の「南無阿弥陀仏」を唱える。頭に、梵語の *namas*（「帰依する」意）を音写した「南無」を置いて、「偉大な阿弥陀仏様、どうか極楽浄土にお導き下さい」と拜む。この

「南無阿弥陀仏様」を原形とする幼児語が「まんまんさん」である。肩車に飛で、青葉の立木隠れよりさしあぐれば、彼性子いたいたけしたる手をあはして、「あれはの、様か」と、目もふらず拜みける社おかしけれ。〔男色大鑑（一〇〇）六・一 情の大盃潰膽丸〕

接尾語の「さま」を略した「なむあみだぶつ」を起点に、随所に各種の変異形を生みながら、下略、母音交替、子音の脱落、順行同化、幾度かの撥音便化、連声現象、音脱落などを経て「なまんだ（ぶ）」にたどり着く。尊く有り難い念仏も再々唱える中にはすり切れてくる。



市門に書き付けて侍ける 空也上人

一度も南無阿弥陀仏と言ふ人の蓮の上にのぼらぬはなし

〔拾遺和歌集（1055）頃か 巻第二十 哀傷・一三四四〕

Namu, 仏に対して称名をしたり、拜礼をしたりするのに使う言葉。

例' *Namu Amida but, Namu meio rengueio.*

〔『日葡辞書』（1603-04）〕

南無あみだく、抑當寺の御本尊目剝の如來と申し奉るは…

〔『傾城阿波の鳴門』（1768）第五〕

其このみをとる數珠とし念佛百万返申さば。往生疑ひ有まじきと

うけたまはつてゆめさめぬ。 (謡曲) (二世紀前) 道明寺)

日蓮宗で唱える題目「南無妙法蓮華経」は「優れた仏法教理の法華経を一心に信じ帰依します、どうかご加護下さい」の思いを表す。

○ 幼い頃、浄土真宗の祖父の家の仏壇の前で、「まんまんちゃん」しようね」と言われ「まんまんちゃん、アツ」とわけも分からず言っていました。最後の「アツ」は大声で…。

(人文・Yさん)

○ 「まんまんちゃん」が「なむあみだぶつさま」ということで思い出しました。小さい時、祖母の家の前に住むおばちゃんをまんまんちゃんのおばちゃんと呼んでいたのを覚えています。そのおばちゃんにはお地藏さんがありました。

(教育・Nさん)

○ 奈良テレビの仏壇屋のCMで、「まんまんちゃん」が出てきます。天女が舞い降り、動物達が指差して「まんまんちゃん」と言うのです。十数年やっています。(人文・Mさん)

阿弥陀仏や神様や先祖の霊、地藏菩薩などを「まんまんあつ」と言って拝む。月や太陽を敬って唱える「まんまんさん」もあり、近畿地方を含めて少なくない。天女も拝む対象になっているようだ。

(3) 「まんまんあつ」はどこから生まれた？

○ 「南無阿弥陀仏」の幼児語は西日本に目立ちます、それは浄土真宗が西日本に多いからではないですか？ 東日本には「南無妙法蓮華経」に由来する別の幼児語がありませんか。

(人文・Sさん)

Sさんは、「まんまんあつ」は、西日本に多い浄土真宗の信徒の子供らが唱え拝む詞だと考えている。確かに、浄土宗や浄土真宗では、極楽往生や家族の平安を願って六字の名号「南無阿弥陀仏」を唱えるが、右の見方は当たっているだろうか。考察の手始めに、『全国寺院名鑑』(史学センター1973-76)に拠って、全国の仏教寺院の都道府県ごとの内訳を表二に集計してみた。その際、各都道府県の寺院数第一位の数字を特太のゴシック体で表してみた。

表二 都道府県を単位とする宗派別の寺院数の内訳

都道府県	宗派		浄土					寺院総数		
	天台宗 府県	真言宗 府県	浄土宗 府県	臨濟宗 府県	曹洞宗 府県	日蓮宗 府県	法華宗 府県		その他 府県	
北海道	13	255	19	1129	25	442	212	74	69	2238
青森県	9	25	102	61	7	171	47	4	18	444
岩手県	58	48	34	67	29	315	34	1	40	626
宮城県	48	99	56	52	95	488	49	2	55	914
秋田県	3	31	49	154	20	349	47	16	15	684
山形県	96	215	117	179	9	741	47	12	70	1486
福島県	164	439	161	93	84	467	50	9	50	1517
茨城県	198	444	97	110	39	199	63	4	101	1255
栃木県	120	379	80	50	52	187	51	0	68	977
群馬県	267	324	74	29	45	362	35	1	55	1202
埼玉県	170	986	142	26	123	522	74	6	102	2151
千葉県	367	1103	147	34	72	328	582	189	126	2948
東京都	162	563	432	381	201	368	447	62	327	2943
神奈川県	93	383	248	123	200	385	294	24	131	1881
新潟県	26	493	89	1253	14	817	145	38	134	3009
富山県	3	97	90	1231	26	229	32	25	10	1743
石川県	15	93	45	1000	13	139	77	19	24	1425
福井県	110	64	101	909	78	296	85	64	75	1782

群馬

ノシノアア、ノシノシアン、ノシノ、ノシノシ、ノシノシアンヘー、ノシノ
サンハーウシ、ナムナム／アン、ハイハイ

埼玉

ノシノサンアツ、ナムヤミナムヤミ、ナンマイナンマイ、ニョーニョー、ノ
シノサンヘー、ナムナム

千葉

ナムナムナムナム、ナンマイナンマイ、ナムノノサマ、ナムナム
ナム、ノノノノノノ、ナムナム／モニヤモニヤ

神奈川

ノシノシアイ、ナムナムナム、ノノノノサンナムナム、ナンマイナンマイ、
ノノノ、ノノノノ、ノシノシノシ、ノノサマハーイ、ノシノハイチャ、
ナムナム

新潟

ナムナムサンアン、ノノサンアン、マンマンサンアン、ナムナム、ナモナモ、
ナンマンナンマン、ナーマンダブ、ナンマイナンマイ、ナマナマ、ナマナマ
アッテン、ノノノノイシ／トトトトサンアン、アーン、パチパチ、アッテン、
パンパン、モニヤモニヤ

富山

ナンナサマアア、ナンナアアツ、ナンナ、ナンナナナアア、ナンナナシ
ナ、ナンナアア、ナンマンダム、ナンマンダ、マンマン、ナンナアアハー
イ

石川

ナンナサマアア、ナンナサンアア、ナンナサンアンアン、ノシノチャン
アア、ナンナムナム、ナンナ、ナンナ、ナムアンダ、マンマン、
マンマン／カミサマパンパンアア、アア、パンパン

福井

ナンナサンアア、ノシノサンアア、マンマンアア、ナンナサンアア、ノ
ノサンアン、マンマンサンアン、マンマンチャンアン、ノシノサンアントー
／ボンボンアン、アッアン、アン

山梨

ナムナム、ナム、マンマン

長野

ナムナムアン、ナンマンナンマンアン、ノシノサンアン、ナンマイナンマイ、
ノシノシ／アン

岐阜

ナンナンアン／アン、ボンボン

静岡

ナモナモ、ノノノノサンナムナム、ノノサマナム、ナンマイナンマイ、ノ
ノノノ、ノノノノ、ナムノノサマ、ノノノノサマハーイ、ノノノノ
サマハーイ、ノノノノカンジー／アアト、アガンマイ、シヤブシヤブ、ボン
ボン

愛知

ノシノアン

三重

チンモンサンアン、ノノサンアン、ノシノシチャンハイ、マンマンサンハ
イ、ノシノサンアア、マンマンサンアン、マンマンチャンアン／アン
ノシノサンアア、マンマンサンアン、マンマンチャンアン／アン

京都

ナムナム、マンマン、ノノサンヘー、ノシノシヘーエ、ノシノサンアア、
マンマンサンアン、マンマンチャンアン／アッアン、アン、アンアン
ノシノサンアア、マンマンサンアン、マンマンチャンアン／アン、アンア
ン

兵庫

マンマンアツ、ノシノサンヘーヘー、マンマンチャンヘー、ノシノサン
アア、マンマンサンアン、マンマンチャンアン／アン

奈良

ノシノシアイ、ノシノサンアア、マンマンサンアン、マンマンチャンアン
／アン

和歌山

ナムナムアン、ノシノサンアン、ノノサマハーイ、マンマイサンハーイ、ノ
シノサンアア、マンマンサンアン、マンマンチャンアン／カンカサンアン、
アン、アアト

鳥取

ノノノサンアン、ノシノサンアン、マンマン

岡山

ノシノサンアツ、ノノノサンアン、ナンマンナンマン、ノシノサンアン、
マンマン／アタハンアツタイ、アッアン、アアト
ノシノサンアア、ナンナンアツ、ノノノサンアン、ノノサンアン、ノシ
ノシサンエツアン、ノノノノアン、ノシノ、ノシノサンアン、マンマン／ア

ン、アンアン、チンチン

広島

ノンノンアー、ノンノサンアツ、ノンノンアツ、ノンノンサンアツア、ノン
ノンノンアツ、ニョーニョーサンアン、マンマンサンアン、マンマンチヤ
ン、ナンマンナンマン、マンマーン、ノンノサンアン、マンマン／アン、
アーン

山口

マンマンアツ、マンマンサンアツ、ノンノサンアン、マンマン／アー、アイ、
アーイ、アツ、アン

徳島

マンマンチャー／カンカサンアン、モツタイサンアン

香川

ノノサンアイ、ママンアーイ、マンマンアイ、マンマンサンアン、マンマー
ン／パチパチアイ、アツアイ

愛媛

ノノサンアン、マンマンサンアン、ナムナム、ノノノ、ニョーニョー、
ノノノサンハライ、ノノサマハライ、ノノサンハイハイ、ノノノサンバ
チパチ／アン、アンア、アンアン、アーン、ハライ

高知

ノンノサンモツタイ

福岡

マンマンアツ、マンマンシヤンアツ、マンマンチヤンアン、マンマンサンア
ツ、マンマンサンアン／ガンガンシヤンアン

佐賀

ナムナム、ニョーニョー、マンマンサンアツ、マンマンサンアン／アツ、
アツアン、アン、アンアン

長崎

マンマンアー、マンマンアツ、マンマン、マンマーン、マンマンサンアツ、
マンマンサンアン／カンカンシヤンアー、カンカンシヤマン

熊本

マンマンサンアー、マンマイサンアツ、マンマンサンアツ、マンマンサンア
ン

大分

マンマンアー、ノンノンサンアイ、ノンノンアツ、マンマンアツ、マンマン
シヤンアツ、マンマンサンアツ、マンマンサンアン／パチパチ、パンパン、
ボンボン

宮崎

ナンナンアツ、ナンマンナンマン、ニョーニョー、ニョンサンハライ、ノン
ノンハライ、マンマンサンハライ、マンマンサンアツ、マンマンサンアン／
パンパン

鹿児島

ナンナン、ナンナン、ナンマーン、ノンノン、マンマーン、マンマンサン
アツ、マンマンサンアン／オート、オートオート、ダンダン、チンチン

沖縄

マンマンサンアツ、マンマンサンアン／ウートートー、トート、ウウ

表三の「南無阿弥陀仏」由来が確かそうな幼児語では、概ね、「ま
んまん」系の濃い分布が西日本や北陸一帯に見られ、「なんなん」
系とそれの母音交替形である「のんのん」系は広く全国に分布する。
浄土真宗は表三の「神仏を讀えて拝んだ詞」とどのように関わるの
か。

まず、表二の仏教寺院の分布状況と、表三の「南無阿弥陀仏」由
来が確かそうな幼児語の全国分布、両者を比較対照させてみる。近
畿以西の西日本では浄土真宗の寺院は地域全体の約三四・八%を占
めており、東日本域での二二・八%に比べかなり高い比率を示して
いる（浄土真宗の寺院自体の分布も西日本域に五六・三%とやや高
い）。

対する、「南無阿弥陀仏」由来が確かそうな「なんまいだ」の幼
児語の方も幾分か西日本域に多様な姿が見られる。さらに詳しく分
布傾向を検するに、さような「なんまいだ」の幼児語は、浄土真宗
の寺院が特に多い新潟、富山、石川、福井、大阪、広島、山口、香
川と九州全域の諸府県などで表現が多様性を見せる反面、当該寺院
が際立って少ない青森、岩手、栃木、群馬、埼玉、千葉、静岡、岡
山、愛媛などの諸県でもその多様性が見えたり（特に静岡が顕著、

当該寺院が圧倒的多数を占める北海道、岐阜、愛知などに多様性が認められなかったりする。

表四に寄せられた各宗派関係者の認識は、日蓮宗以外は「信徒は南無阿弥陀仏を唱え、その家の幼児も『まんまんあつ』を言う」だった。

音訛形の多様性は「阿弥陀仏」への関心を示す尺度と考えると右に述べた諸傾向を勘案してみると、神仏を讀えて拜む詞の「まんまんあつ」は、浄土真宗の礼拝と全国的な広がりを見せる阿弥陀仏信仰の両者が複雑に関わり合ったもので、いずれか一方のみの影響は考えにくいのではないか。

表四 「まんまんあつ」に関わる各宗派関係者の認識（要約）

天台宗	比叡山幼稚園では仏様のことは「ののさま」という風に言っている。天台にも阿弥陀仏の信仰はあり、回向の際には南無阿弥陀仏を唱える。
真言宗	関東で仏様のことを「ののさま」と言うと言っている。檀那寺の住職が檀家さんに教えているわけではなく、自然に親から子に伝えられている。
浄土宗	幼児向けに「なむなむ、しましょ」と言う。
浄土真宗	研究所スタッフ十名程度の内省では、長崎・福岡・鳥取・大阪・滋賀・愛知の広範囲で、幼児期に「まんまんちゃん（さん）・あん」と唱えていた。
臨済宗	「ののさま」と言っていた。
曹洞宗	お唱えに熱心な宗派ではないが「ののさま」「なむなむ」とは言っている。
日蓮宗	「南無妙法蓮華經」を唱える。「なんまいだー」に比べて幼児語化されにくく、ちゃんとと言えない。「なんみよほうれんげさま」しか聞かないようだ。
法華宗	阿弥陀信仰の強い地方で、幼児が仏様を指して「まんまんあつ」「まんまんあーん」「やまんまんちゃん」「ののさん」と言うのではないか。

Sさんの言う「南無妙法蓮華經」に由来する幼児語は無いようだ。

二 子供は奔放な悪態が大好き

(1) 「ばか、あほ、まぬけ」が飛び交う

諷刺的^{いざか}な場で子供らが投げる悪態の「ばか、あほ、まぬけ」は、「下手な鉄砲も数撃ちや当たる」類の相手構わぬ喧嘩の際の決まり文句である。

○ 子供の頃「バカ、アホ、マヌケ、チンドン屋」と言っていました。
突然チンドン屋さんが出てくるのはどうして？（人文・Aさん）

Aさんの質問を受け、「まずは実態の把握を」と思って二〇〇三年度の受講生を対象にアンケート調査を行ってみた。二八三名の殆どが九州、中国、四国の出身者だった。左の二つが質問項目である。

問一 悪態の「ばか、あほ、まぬけ、ちんどんや」を言ったか
聞いたかしたことがありますか。

問二 「ばか、あほ、まぬけ、ちんどんや」以外の言い方がありましたか。

先の「まんまんあつ」調査の場合とは様相が一変、「言ったか聞いたかした」と答えた者が二六九名で全体の約九五%に上った。欄外や裏面にまで書き込んできた学生もいた。表五-1、2には問二に答えた出身地別（山口県内と山口県外）の喧嘩の際の決まり文句を示し、表六には真田信治・友定賢治編『県別罵言雑言辞典』（東京堂出版二〇一一年）が載せる全国の「子ども喧嘩決まり文句」を挙げた。

表五-1では回答を寄せた山口県内出身者の全員が、悪態をまず「ばか」から切り出し、表五-2の山口県外の西日本出身者（近畿出身者は少数）の大半も同様だった。その後に「あほ」が続き、更

に「まぬけ」や「どじ」が追い打ちを掛ける形の文句が多かった。なお、東日本出身者は三名である。

一方、表六を通覧して気づく喧嘩の際の決まり文句の特徴は、「ばか」類が、近畿圏一帯に広がる「あほ」類を東と西の両側から囲む、「ABA型の分布相」が見えることである。全国的に「ばか」「かば」「あほ」「ちんどんや」「でべそ」がよく登場し、近畿の独自色は「あほ」「ひよっとこ」「ぼけ」「まぬけ」「豚のけつ」の五者に現れるか。「かば」は、「馬鹿」の音位転倒形か、近畿の「豚のけつ」相当の「特大」を意味する「河馬」だろうか。両者が密接に関わった可能性もありそうだ。

表五-1の山口県内出身者の内省には「ばか、あほ」型が多く出たが、全国に多い「ばか、かば」型も少数ながら見出され、生涯学習講座等の七十歳代の女性受講生も、「ばか、かば、チンドン屋、おまえの父さん出べそ」(山口市)「ばか、かば、チンドン屋、おまえの父さんはげ頭」(下関市)と答えてきた。『ばか、かば』は山口県内でも古くからある喧嘩の際の決まり文句」と考えられる。筆者の調査は、Aさんの訊ねてきた「ばか、あほ、まぬけ、ちんどんや」を例文に挙げ、その他の物言いも「あれば記すように」求めた。そのことが、「ばか、あほ」の答えを誘導した面は否定できない。それは山口県外出身者から得た回答についても同様である。一方で、山口県内出身者が、歌に乗せて「ばか、あほ、どじ、まぬけ、あんぼんたんのカス」「ばか、あーほ、どじ、まぬけー、おたんこなす、かばちゃ」「ばか、あほ、まぬけ、どじ」を答え、放送大学の若い受講生にも「ばか、あほ」型の増加傾向が見えていた。喧嘩の際の決まり文句の「あほ」自体が近畿圏から流入しつ

つある側面も考える。松本修『全国アホ・バカ分布考 是るかなる言葉の旅路』(天田出版一九九三年)に載る「全国アホ・バカ分布図」にも、中国西部や四国辺りにバカ系にアホウ系が混入する姿が見える。

表五-1 子供の喧嘩の際の決まり文句(山口県内出身者)

ばか、あほ／ばか、あほ、どじ、まぬけ／(歌いながら)ばか、あほ、どじ、まぬけ、あんぼんたんのカス／ばか、あほ、どじ、まぬけ、おたんこなす／歌いながらばか、あーほ、どじ、まぬけー、おたんこなす、かほちゃ／ばか、あほ、どじ、まぬけ、おたんこなす、かばちゃ(3)／ばか、あほ、どじ、ちんどんや、おまえの母さんでべそ／ばか、あほ、どじ、まぬけ、ちんどんや／ばか、あほ、どじ、まぬけ、ちんどんや、(2)、おたんこなす／ばか、あほ、どじ、まぬけ、ちんどんや、お前の母さんでべそ／ばか、あほ、どじ、まぬけ、でぶ、てんさい、どてかほちゃ／ばか、あほ、どじ、まぬけ、ちんどんや／ばか、あほ、どじ、まぬけ、ちんどんや、おまえの母さんでべそ、車にひかれてべつちやんこ、空気入れたらもとどおり／ばか、あほ、なすび、ちんどんや、まぬけどじ、まぬけ／ばか、あほ、ぼけ、なす、どてかほちゃ／ばか、あほ、まぬけ／ばか、あほ、まぬけ、おたんこなす、かばちゃ／ばか、あほ、まぬけ、おたんこなす、かほちゃ、しっぽ、しっぽにしっぽ、あんな嫌い／フン／ばか、あほ、まぬけ、ちんこ／ばか、あほ、まぬけ、ちんどんや／ばか、あほ、まぬけ、ちんどんや、おたんこなす(2)／ばか、あほ、まぬけ、ちんどんや、おたんこなす、おまえの母さんでべそ／ばか、あほ、まぬけ、ちんどんや、どてかほちゃ／ばか、あほ、まぬけ、どさくちび／歌に合わせてばか、あほ、まぬけ、どじ／ばか、あほ、まぬけ、どぶす、ちび／ばか、かば、あほ、ちび、まぬけ、ちんどんや、モーツアルトの歌に乗せて、ばか、かば、ばく、くじゃく、くま、マントヒビ、ひよこ、コアラ、ラッコ、コブラ／ばか、かば、あほ、まぬけ、ちんどんや／ばか、かば、ちんどんや、お前の母さんでべそ／ばか、どじ、まぬけ、お前の母ちゃん

でべそ

(一) 内は複数の回答者数

表五―2 子供の喧嘩の際の決まり文句(山口県外出身者)

あほ、かす、なす／あほ、ばか、まぬけ、ちんどんや／あほ、ほけ、かす、なす、うんこ／あほ、ほけ、まぬけ、ひよつとこ、なんきん、かほちゃ／パーカ、アーホ、ちんどん、間抜け、眼鏡ラッキョウ、土手西瓜、ふーたん、ひよつとこ／ばか、あほ、どじ、にんじん、どてかほちゃ／ばか、あほ、どじ、まぬけ、いかた、た、ほげ、ほよん／ばか、あほ、どじ、まぬけ、かす、ちび／ばか、あほ、どじ、まぬけ、将來ちんどんや／ばか、あほ、どじ、まぬけ、ちび、ちんどんや／ばか、あほ、どじ、まぬけ、ちんちんけりあげ、あいたた／ばか、あほ、どじ、まぬけ、ちんどんや／ばか、あほ、どじ、まぬけ、ちんどんや、おたんこなす、どてかほちゃ／ばか、あほ、どじ、まぬけ、ちんどんや、ついでにとんちんかん／ばか、あほ、ちんどんや／ばか、あほ、まぬけ(2)／ばか、あほ、まぬけ、うんこたれ／ばか、あほ、まぬけ、おたんこなす(2)／ばか、あほ、まぬけ、おたんこなす、かほちゃ、アーメン、ソーメン、ヨーロッパ／ばか、あほ、まぬけ、おたんこなす、かほちゃ、につば、なつば、みそつば、あんた○○おつ／ばか、あほ、まぬけ、おまえの母ちゃんてべそ(2)／ばか、あほ、まぬけ、くるくるばあ／ばか、あほ、まぬけ、ちび／ばか、あほ、まぬけ、ちび、なす、どじ／ばか、あほ、まぬけ、ちんどんや(2)／ばか、あほ、まぬけ、ちんどんや、おたんこなす、あほ、まぬけ、おたんこなす／ばか、あほ、まぬけ、ちんどんや、おまえの母ちゃんてべそ、豚のけつ／ばか、あほ、まぬけ、ちんどんや、おまえの母さんてべそ／ばか、あほ、まぬけ、ちんどんや、かば、ひも、かす、こみ／ばか、あほ、まぬけ、ちんどんや、くそつたれ、おまえの母ちゃんてべそ／ばか、あほ、まぬけ、ちんどんや、でべそ／ばか、あほ、まぬけ、ちんどんや、豚のくそ、まぬけじじい、しんじまゑ／ばか、あほ、まぬけ、ちんどんや、豚のけつ／ばか、あ

ほ、まぬけ、ちんどんや、ほけなす／ばか、あほ、まぬけ、ちんどんや、ロシヤ、やまときん、きんたま／ばか、あほ、まぬけ、どじ、ちんどんや／ばか、あほ、まぬけ、とんちんかん、なす、かす／ばか、あほ、まぬけのちんどんや／ばか、あほ、まぬけ、豚のけつ(2)／ばか、かば、ちんどんや、おたんこなす、かほちゃ、出つ菌、そつ菌、みそつ菌、あんた嫌い／ばか、くそ、まぬけ、ちんどんや、おまえの母ちゃんてべそ／ばか、だぼう、まぬけ、ちんどんや、おまえのおかんてべそ／ばか、ばか、エヘン虫／ばか、ほけ、かす、なす

(一) 内は複数の回答者数

表六『別刷 罵詈雑言辞典』所収の子ども・喧嘩決まり文句

〔北海道海岸部〕ばか、あほ、はなつたれ、くそつたれ(北海道内陸部)ばか、かば、おまえのかーさん、でべそ(青森)泣いだほんす笑った／家の前の鬼つこ、ろー(宮子)えーろ！へつびりむーし！おしりべんべん／めつききゅーりめくそはなくそ、おたんこなす、ふるだびつき(宮城)ばかくそつたれこのくそむぐすこのあんぽんたん、ちんどんや(秋田)泣き虫はんぼ家さ行つて飯ままだじよじよ煮でねえんえん(山形)おまえな、しゃねはー／おまえな、あつちやんげはー／おらいの○○ちゃんさおしえてける／(ば)が、かーば、ちんどんや！おまえのかーちゃん、でーべそ(福島)ばが、かば、ちんどんや。おまえのかあちゃん、あがでべそ。おまえもよく、にでちゅーでべそ(茨城)ばが、ばが、ちんどんや。おまえのかーちゃんてべそ。おまえもやつぱりでべそ(栃木)ばーかこーけちんどんや、おまえのかーちゃんてーべそ(群馬)みつちゃん道端、うんこしてー紙がないから、手でふいてーもつたないからなめちやつたーつ、へーだ／ばーか、かーば、ちんどんや、おめーのかーちゃんてーべそ(埼玉)おまえのかーちゃんてべそ／あつかんべーがしよつべーや／いい気味い山椒い実いが成つた(千葉)野郎、○○にゆすけつからなー／野郎、後あとでほえづらかぐなよー／この野郎、あばら持つて骨はだぐど(骨ふるぐど)／野郎、いげー顔すつたねーどー／後で

泣きしよたれんなよー／ごどつばな／くつ垂らしてつたねー（東京）ばか野郎／この野郎（神奈川）ばーか、かーば、ちんどんやー、おまえのかーちゃん、でーべそ（新潟）ばか、かば、ちんどんや、おまえのかーちゃん、でべそ（富山）かちころすぞ（石川）ばか、かーば、ちんどんや、おまえのかーちゃん、でーべそ（福井）ばーか。あーほ。のくてーの（山梨）あーられこれ、知らんぞ知らんぞ、おーらんとー知らんぞ／うらーいや／やはーい／えーきびさんしょーとーがらし（長野）ばか、かば、ちんどんや、おまえのかーちゃん、でべそ、おまえもやつぱりでべそ／いーけななんだ、いーけななんだ、せーんせーに言つてやれ（岐阜）ばか、かば、ちんどんや、おまえのかーちゃん、でべそ（静岡）ばか、とろ、ちんどんや、おまえのかーさん、でべそ（愛知）特になし（三重）ばか、かば、ちんどんや、おまえのかーちゃん、でべそ／あほ、ばか、まぬけ、ひよっこ、なんきん、かほちゃ（滋賀）あほんだら／（うーわわこわわ）（いーややこやや）いーしゃしゃこしゃしゃ、せんせーに言ーたる／あほ、ばか、まぬけ、おまえのかーちゃん、でべそ／あほ、だら、ちんどんや、おまえのかーちゃん、でべそ／なんじ、なんぶん、なんびよー、地球が何回まわった時／水尾みづおの学校、べちや学校（京都）あほばか、ちんどんや、おまえのかーちゃん、でーべそー／あほが見ーるー豚のけーつー（大阪）あーほー。うっさいんじや。黙れ／うっといんじや。いーだ。あつかんべー／いっぺん死んでこい。目え囃んで死ね／あーほーばーかーまーぬーけー、ひよっこなんきんかーばーちんやー（兵庫）あほー、ほけー、ちんどんや、ひよっこなんきんかほちゃ。おまえのかーちゃん、でーべそ。やつぱおまえもでーべそー／あほー、ばか、まぬけ、ひよっこなんきんかほちゃ。おまえのかーちゃん、でーべそー。やつぱりおまえもでーべそー（奈良）あほほけちんどんや（和歌山）「ドレミの歌」のリズムで）さーるのけーつ、まっかつかー／おまえのかーちゃん、でべそ／あほが見ーるーぶたのけーつー（鳥取）ばか、かば、ちんどんや、おまえのかーちゃん、でべそ（鳥根）このだーくそやー（岡山）ばーかかーばちんどんや、お

めーのかーちゃん、でーべそ（広島）馬鹿が見る、豚のけつ（山口）ばか、かば、ちんどんや、おまえのかーちゃん、でべそ、いーつになつたらひっこむか、十月三日のうんどーかい、すべつてころんでひっこんだ（徳島）ばか、かば、ちんどんや、おまえのかーちゃん、でべそ（香川）あほー。ほっこ。くそぼっこ。覚えとけー／ばか、かば、ちんどんや、おまえのかーちゃん、でべそ／とたんやね（愛媛）ばか、かば、ちんどんや、おまえのかーちゃん、でべそ。やつたるかー（高知）あつかんべー。のーたりん。でべそ。目え囃んち死ね／いわしの頭の骨かつき（〇〇のいわしの骨かつき）／馬のくその灰かぶり（〇〇の馬の尻たき）／〇〇のやしん子（福岡）なんかききさん、この（佐賀）ばか、かば、ちんどんや、おまえのかーさん、でべそ（長崎）わーがんだつたいつちよんすかん。あつち行け／わーが、ばかやつか（熊本）ばか、あほ、ちんどんや、おまえのかーちゃん、でべそ（大分南部）覚えちよれ、お母ちゃんに言ーちやるぞ。いーえー／〇〇の学校はほろ学校ほーき一本ない学校／〇〇の生徒が尻をひつたいーくつひつたとーひつた隣のかんすーひり割った（大分中部）覚えちよれ、こんだみちよけ（宮崎北部）覚えちよれ、こんだみちよけ／今度おーたときにやほえづらかくなよ（宮崎中部）覚えちよけ／〇〇の子どもはどんぐりがらも切つて干さてこずかれて三月三日のからいも団子じゃ／〇〇の学校は豚学校、豚ーと呼ばれて残念だ（鹿児島）こんばかが（沖縄）鼻ひがりんどー／とーひやー、ないらーしえー

喧嘩の際の捨て台詞・決まり文句・脅し文句を一括して記述した青森、岩手、山形、千葉、滋賀、大阪、香川、高知、長崎、大分、宮崎のそれは、そのまま引用した。

悪態に男女の差は無く「言つたが勝ち」と畳みかける。表五ー一には、表六が示す「山口県の喧嘩の際の決まり文句」以外の表現も多様に見られ、各地で世代、地域、学区などごとになお異なる物言いがあろうだ。

馬鹿に兵法なし『せわ焼草 二』(1666) 世話畫卷第二十一曳言之話

此の聖梵、現世には司もならず、臨終にはさまざま罪ふかき相どもあらはれて、「彼のあほうの」と云ひてぞ終りにける

〔発心集〕(136頃) 第八・十一聖梵永朝難山住南都事

丹「まぬけめへ直に腹アたつから、何でも聞れやアしねへ

「X」よふ私ア間拔サ。：」

〔春色梅兒譽美〕(832,833) 初編卷之一・第二齣

また彼お滋といふ少女も、なんほ郷在の芋掘だと言ても、餘まり鈍智じやアねへか。蔭をかくして他を騒がせるにやアあたらねへ。

〔閑情末摘花〕(866) 第五編卷之中・第二七回

相手の大切な人を「おまえの母さん出せ」と虚仮にする。父親が喧嘩の際の決まり文句に拳がつてこないのは仕返しに怖いからかと思つたが、生涯学習講座等を受講した前掲山口県内出身の七十歳代の二人の女性の場合は、しっかりと「おまえの父さん出せ」「おまえの父さんはげ頭」と言っていた。

(2) 野菜がどつさり

子供同士は始終喧嘩する。そこでの相手の無能、不格好を言い立てる悪態の決まり文句、その無能、不格好の喩えに「不出来な野菜」も登場する。表六を見ると近畿地方にやや目立つが、表五1、2を見ると西日本にも広く顔を出している。身近にあった農村風景の反映か、先の「あほ」の場合と同様近畿圏から流入したものが。上に「どて」「おたんこ」等の接頭語も乗せ、「出来損ない奴」と言いつのる。動物名は「豚」の他は少数の「鳥賊」「鯛」「馬」「猿」「蜻」「墓蛙」等が見える。「馬、猿、豚」には多く「尻」が続く。

表皮の凸凹の品種が普通だった南瓜(南瓜)から容貌の悪さを連

想し、「かぼちゃに目鼻」で不美人を表した。方言集の報告に拠れば、「かぼちゃ」も、「醜い女」(新潟、長野、岐阜、愛知の各県)「背

の低い人」(大阪府、岐阜、奈良両県)「頭脳の劣る人」(低脳の頭腦)

(島根県)を表し、「なんきん」も、「背の低い人」(山梨県)「野暮な人

(大阪府)「虚言」「出鱈目」(大分県)を指した。安価だった茄子は

「貧しさ」の喩えに使われ、方言でも、「なす」が「愚かな人」(埼玉、山梨両県)を、「はけなす」が「無精者」(長野県)を表した。

どこまで剥いても皮ばかりの辣韭は、方言の物言いで、「らっきょう」(新潟県)「らっきょうずら」(東京都と大分、鹿児島両県)

で直截的に「鉄面皮、厚顔」を言い、「だつきゅ」(熊本県)が「怠

け者」になる。偽物が多かった朝鮮人参に言寄せて、「にんじんだ

まし」(滋賀県)で「巧みに人をだます人、欺瞞者」を言った。表

六の悪態では、芋(宮崎)、胡瓜(岩手)、山椒(埼玉、山梨)、唐

辛子(山梨)も現れる。役に立たぬ男や醜女を言った歴史を持つ

糸瓜は出て来なかった。

泊り客けふもかぼちやと笑出し (『露丸評万句合』(1766))

時かぬ種は生えぬくと油断した、娘のしだら親のなんきん

(『いろは歌當和訓』(天保(1860))

思へばく和尚様、目剥の如來で銀儲け、銀澤山な此の寺へ、

来ると其の盃盗人に、遭ふと云ふのはあたすかん、よくくなす

ひな生まれ性、夫れが悲しいく。(『傾城阿波の鳴門』(第五

何所の馬の骨か知らねえが大それたのだわ言、人參だましでいた

ぶり掛け、金でもあつたらぶつたくる仕事に掛けた追落しか、う

ぬがやうな太えやつア、： (『網模様燈籠菊』(1871)序巻)

(3) 「チンドン屋」とは何か

「ちんどん屋」(点線部) は子供の悪態によく顔を出す。厚化粧して楽器も服装も和洋、新旧とりどりに、チンチンブカブカドンドンと、武島羽衣作詞・田中穂積作曲の「美しき天然」(二九〇五年) などを奏でながら練り歩き、「大売り出し!」「新装開店!」と触れ回る。ちやうど店じまひに雇はれたチンドン屋みたいに、小屋そのもののうちに陰に籠った衰運を白日にさらけ出したやうなありさまであつたが、… (川端康成『虹』(1934+1936))

「お前は剽軽な奴、騒がしい奴、まるでチンドン屋さん」と決めつける。時に、「ちび」(太実線部) も出して韻を踏むように繋ぐこともある。

表五―2では、「ばか、あほ、どじ、まぬけ、ちんちんけりあげ、あいたた」と「ちんこ」類を持ち出している。男の子は、「うんこ、金玉、糞(馬の糞、鼻糞、糞つ垂れ)、尻、小便、尻、ちんこ、屁」(実線部) も含め排泄関連の文句が好きなようだ。「ばか、あほ、まぬけ、ちんどんや、ロシヤ、やまときん、きんたま」も見える。別途、「ばか、あほ、まぬけ、ちんぼこ屋」と書いてきた質問カードがあった。表五の二つの表の若年層の野菜を取り上げた悪態には「おたんこなす」が目立つ。

モーツアルトの『アイネクライネ・ナハトムジーク』の旋律に乗せた「うばか、かば、ばく、くじゃく、くま、マントヒヒ、ひよこ、コアラ、ラッコ、コブラ」では、悪態は「かば」で打ち止めにし通して尻取り遊びに専念する、その丸くなった棘に救われる。

○ 実家の柱には「○○(母の名です)のばか、まぬけ、ちんどんや」と書いてあります。(人文・Aさん)

Aさんが紹介するのは、母親と叔母が少女だった頃の諍いの痕、五十年過ぎても消えない「う柱のキズは一昨年おとししの…」である。

三 日本語を学生と学ぶ

(1) 「しんぶ」は「おやじ」のこと

○ 森進一の歌の「うお袋さんよ、お袋さん、空を見上げれば」の「お袋」って母親のことですよ。子供の頃は言ったことがないので、最近自然に出ます。どうしてお袋なんですか。(経済・S君)

参考までにと、柴田武『知ってるようで知らない日本語3』(こま書房一九八八年) が紹介する語源説、「母は家計をあずかり、金銭などを袋から出し入れする締めくりをするから:」、「子どもは母親の胎内にいるとき、胞衣えん衣に包まれ、袋にはいったような状態であるから、その袋をさす:」、「母は子どもをふところに抱くので、オフトコロからきた:」などを紹介、併せて『虎明本狂言』の用例を板書した。

て、おやはしんぶと云、は、おや(を)はおふくる、あにをはしやきやう、おと、はしやていと云ものじやいやい、…

続けて次のように説明していった。

(『虎明本狂言』(写) 倉弟)

「かあさん」は「かかさま」が原形で、「とうさん」は「ととさま」が原形ですね。『傾城阿波の鳴門』（第八）の子供の巡礼の台詞には「父様の名は阿波の十郎兵衛、母様はお弓と申します。」とあって、「日葡辞書」も、「かか」を「子供言葉」、「とと」を「子ども」の使う語と言っています。「ちち」「てて」「とと」の三者は相互に母音交替した語形ですね。

宮の御でてにてまるわろからず、まろがむすめにて宮わろくおはしましやう。
〔紫式部日記（1010頃か）〕

Caca Fanaに同じ。母。これは子供の言葉である。↑また、尊敬すべき婦人、あるいは、年長で一家の主婦のような婦人の意に取られる。
〔日葡辞書〕

Tofo. 父。これは子どもの使う語である。
〔同前〕
七つばかりの子が、母の袖にすがりて、「と、さまの所へいたひ」といふにぞ、扱は末の子とはしれる。
〔武家義理物語（1688）五・二〕

調子に乗って続けて口走った一言が全く余計だった。教室中に一瞬「えっ」の気配が漂った。

左の『日葡辞書』や先ほどの『虎明本狂言』に見える「しんぶ」は「実の父親」を指しています。「血の繋がらない父親」は、左の『和名類聚抄』にも見られる「継父」（継母の対義語）ですね。

Xinbu. Chichi vorya. 父。
〔日葡辞書〕
継父母 … 和名継父万々知々、継母万々波々、一各謂其子古我不生義也
〔二十卷本和名類聚抄〕卷二・三三ウ

左に挙げるNさんが淡々と書いてきた質問カードが「レッドカード」に見えた。その指摘の通り、「おやじ」の改まった物言いが

「親父」（漢語）だった。因みに、自分の兄が「親兄」である。

○ 「お袋」の語源を説明する時、先生は、「日葡辞書」や「狂言」にある「Xinbuちちおや（日葡辞書）」は実の父をいう「真父」のことかな、と言われたけど、「親父」の音読みなのでは？
（人文・Nさん）

語曰、雖有親父、安知其不爲虎。雖有親兄、安知其不レ爲狼。
〔史記 十一〕（前漢）韓長孺列伝第四十八

親父入道相國の軀をみるに、惡逆無道にして、ややもすれば君をなやまし奉る。
〔平家物語〕（16世紀前半）卷第三 医師問答

(2) 「ふくよか」が良いな

「ばか」には種々語源説があるが、筆者は、「割れる↓ばれる」[退く↓どく]「やかましい↓じゃかましい」などの形態的变化に類する、「雅語形容詞『はかなし』の語根、その語頭を濁音化させた強調表現」説に惹かれる。

左の『新明解国語辞典 第五版』（三省堂 一九九七年）が説く「ばか」の「定義①」は的を射て鋭いが、残念ながら、その後に出た第六版の説明はやや穏やかになっている。

① 記憶力・理解力の鈍さが常識を超える様子。また、そうしか言いようの無い人。「人をのしる時に最も普通に使うが、公の席で使うと刺激が強過ぎることが有る。また、身近の存在に対して親しみを込めて使うことも有る。例、「あのー」「あいつ」が／＼」「女性語で相手に甘える時の言い方」…

なかにし礼作詞・鶴岡雅義作曲の『君は心の妻だから』（一九六九年）

の一節「ト僕にすがって 胸を叩いて…」では、ただ泣くばかりでなく「はかばか」や「いやいや」も言っている。その繰り返しの表現の中に甘えを垣間見ることが出来る。

○ 「だく」と「いだく」の課題で中学の頃「文字絵」を描きました。「いだく」は心の繋がり「だく」は体の繋がりでした。

(人文・Tさん)

○ 「デブ」や「ブタ」と言われると不愉快ですが、「ふくよか」ならニュアンスも和らぎ日本的な感じがします。

(人文・Nさん)

○ 語頭に濁音が来る語には私も違和感を感じますが、母は、女の子の名前に濁音を含むと男運が減ると言います。

(人文・Mさん)

Tさんが描いた文字絵、「だく」と「いだく」の比較は面白い。木下龍太郎作詞・江口浩司作曲『忘れな草をあなたに』(一九六四年)は、「ト喜びの喜びの 涙にくれて 抱きあう 抱きあう…」と唄うが、語頭の「い」を落とした濁音剥き出しの「抱く」は、強者が弱者を、例えば幼な子を母親がひしと抱き取るような姿が本来だった。

平治に父義朝わ討たれ、母ときわの懐に抱かれて (daacare)、
ここかしこを迷い歩いたを清盛入道殿たづね出させられたれども、幼ければ、不便なとあつて、捨てをかせられたほどに、鞍馬の寺に十四五までいたが…(『天草本平家物語』(38) 巻四・第十六) もう二度とアマン 別れるのはいやよ そう言つて僕を抱きすくめる… (杉紀彦作詞・森田公一作曲『アマン』(一九九二年))

前者の例は母親の常盤が、幼い牛若を抱きながらの逃避行、後者の

方は、振った「女心と秋の空」「女を磨く」等の物言いで、近年とみに目立つその「諺や慣用語への昇格の勢い」も成る程と思わせる。Mさんの質問から、中東イランの元外相ゴドブザデ氏を思い出した。

むずびにかえて

佐倉修氏は「評価」を言いつのる昨今の世相に警鐘を鳴らす。

研究と教育に当てる暇やゆとりを「贅沢」と言うべきではない。一口に大学とか研究といっても、そのありようは実にさまざまなのだ。研究対象によっては成果が出るまでに時間のかかるものもあるし、研究費がそんなにたくさん集められない分野もある。にもかかわらず、昨今の大学評価では、すべて一律に論文数や研究費獲得数、国際学会招待講演数などを「研究成果」として挙げるのが求められる風潮にある。

これはかなり危ういことではないか。サッカーと体操競技と柔道をひとくくりにして、観客動員数や年間当たり国際試合数を「活動の尺度」にするのは、無理というものだろう。

(朝日新聞) 二〇〇五年二月一七日付

次世代の「ゆとりある育成」を音を上げずに続けたいものである。

(注)

1 和棕櫚とは別に葉の垂れ下がらない中国原産の唐棕櫚があり、主に庭木の観賞用に植えられる。

2 杉浦日向子『うつくしく、やさしく、おろかなり』私の惚れた

「江戸」(筑摩書房二〇〇六年)参照。町田武士『やまづめぐる 30年の農
的生活を通して』(ツニー・マガジンス二〇〇六年)には、「…竹林があれば、
枝は竹ぼうきや生け垣に使い、竹自体は稲の畦かけや支柱にな
る。もちろん、たけのこが育つと食べることができるし、その皮
はお弁当や草履づくりにも使えるのだ。」とある。

3 「おたんこ」は「おたんちん」に同じか。関西では「おたやん」。
「おたん」は「ひよっこ」と対の「お多福」の音脱落形ではな
いか。ともに不細工な顔の意。「どて」は「土手っ腹」の「土手」
と同じ「太い」の意か。

4 動物名として左にはスッポンが見えている。

「あほ、ばか、まぬけ、スッポン、なんきん、かぼちゃ」

誰かが言った。向こうからしきりに手を振ってきた。

「けなされてんのに、手エ振つとる」

(奥田継夫『ボクちゃんの戦場』(理論社一九八五年)

併せて、長野伸江『この甲斐性なし！と言われるとツライ 日

本語は悪態・罵倒語が面白い』(光文社二〇二二年)を参照。

方言例の多くは、尚学図書編『日本方言大辞典』(小学館一九八九
年)を参照した。なお、山口大学人文学部の柏木寧子氏(思想史学)、
天台宗延暦寺総務部、真言宗大覚寺派宗務庁教学課、浄土宗総合研
究所、浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター、浄土真宗大谷派教
学研究所、臨濟宗妙心寺派教化センター、曹洞宗総合研究センタ
ー、日蓮宗身延山久遠寺、顕本法華宗総本山妙満寺の各位からそれ
ぞれ懇切なご教示を賜った。記して感謝申し上げます。

(そえだ・けんじろう)